
博物館学教育で災害を伝える事

—2016年熊本地震を経て、これからの博物館に関わる人材の養成を
考える—

To communicate disasters with museum study education

—After the 2016 Kumamoto Earthquake, think about the training of human
resources related to the future museums—

山内 利秋

Toshiaki, Yamauchi

Abstract

The 2011 Great East Japan earthquake disaster was an opportunity for university students to participate in various social problems. However, at Kyushu district universities away from the afflicted area, such experiences were thin.

The Kumamoto earthquake in April 2016 occurred in the prefecture next to the university to which the author belongs but this was the opportunity for students to think about disasters and society. In consultation with the student, we conducted an exhibition on the theme of disaster prevention at the museum's practical training. In this process students learned the meaning of disaster and communicating it.

キーワード

博物館・博物館学・学芸員養成・災害・熊本地震・防災教育

1: これまでとこれから

甚大な被害をもたらした東日本大震災は、一方では大学生が、自らと社会との関係性を繋いで行く上で極めて重要な機会でもあった。平成23(2011)年当時、被災地に自身の所属する学校が所在していたり、あるいは実家が被災地にある学生は大きな困難の中で大学生活を送らなければならなかった。さらに東北地方に隣接し、圧倒的に学校数の多い東京を中心とした関東地方の大学と大学生もまた、少なくとも災害を身体的に理解するという機会を得ていた。卒業式が執り行われなかった大学も数多く存在した。

こうした経験を経ている大学はその後、学生が自発的に行動を開始したり、大学当局や教員が主導して活動を促すといった方法でボランティア等様々なアクションが興り、東北被災地に何らかの関与の機会が生まれたというのは必然

でもあった。これは平成7(1995)年に阪神淡路大震災を経験し、その記憶が残っている近畿地方の大学と大学生にとっても、東日本大震災はこうした活動を行う機運が改めて生じていたと考えられる。阪神淡路大震災以降の近畿地方諸大学においては、大規模災害を前提とした社会との対峙が様々な分野における学修活動の中で活かされており、そもそもそれは、関東地方・東日本の大学以上に問題意識としては高かったと言えよう。

一方、同じ日本列島の中にあってもこのような経験から離れてしまったのが、近畿地方よりもさらに西の地方であり、特に九州地方がこれにあたるだろう。平成17(2005)年の九州西方沖地震や東日本大震災直前に発生した新燃岳噴火を経験しているとはいえ、その被害は前後の2つの大震災に比較すると限定的であった事が幸いしてか、大学・学生が大規模災害の被害に遭うという経験が希薄であった^(註1)。

それは、大規模災害と社会の関係を考える経験を経た前記地方の大学との大きな違いとして表面化しており、特に学生にとっては卒業後に社会人として活躍するに際し、突然襲ってくる天変地異に対して、防災・減災と日本社会の今後という視点を持てるか持てないかといった差として現れてくる恐れすらあった。学生のみならず、教職員にとっても「災後の社会」構築に対する理解を持つ事と持たない事とでは、様々な大きな課題に直面している我が国の未来を担う人材を育成すべき大学としての活動に大きな影響がある点は容易に予測出来るのであった。

このような危惧から、筆者自身、東北被災地と筆者が所在する宮崎県や県内の博物館、さらには学生との接点を探ってきた。この活動は東日本大震災発生数ヶ月後から開始し、宮崎県内での被災地写真展の開催や被災博物館資料の情報化支援といった活動に繋げている。震災翌年の平成24年には、仙台市を中心とした被災者自身が撮影したリアルな生活状況の写真の前で、震災をテーマとした書籍を学生の朗読で実施してそれを宮崎県内市民に聴いてもらったり、陸前高田市立博物館から山形文化遺産防災ネットワークによって救済された資料の情報化支援といった活動に授業の中で関与させるといった、災害と被災地への理解と関心を促す事—可能ならば自らがアクションを興してほしいと願いながら—を期待した企画を実施している。だがそうした活動が当時の学生に対してどのような影響を与えられたのかと言うと、余り大きくはなかったと考えている。当時はこれが限界であった。

東北と九州とでは心理的にも距離的にも遠く、そもそも人間関係が限られている若い彼ら彼女らにとっては、メディアの中で知る以上のリアリティーを獲得する事は極めて難しかった。関東地方の大学のように大学当局として積極的に学生を現地へのボランティア活動へ送り出したりする事で課題を認識し、その後のキャリア構築にも関わっていく学修活動へは抜けられなかった^(註2)。

そうした中、平成28(2016)年4月14日に熊本地震が発生した。普段、大きな地震が殆どないとすら思われていた九州地方にとっては、極めて広範囲に及

ぶ影響をもたらし、特に熊本県や大分県の被災者には長期間の苦難が続いている。

熊本地震の被災地に対して我々が出来る事は何か。被災地に近い大学がどのように関与していくべきか。これまでの大規模災害時にそれぞれの被災地とそこに関わった大学と同様に、また、東日本大震災時に筆者自身も考え・行動していた事以上に実践していく必要があった。特にそれは、大学教員としては今述べてきたような学生のキャリア形成に大きく関わってくるという側面を大きく考えざるを得ないし、もちろんもう少し狭く博物館に関わる人材の育成という側面からも極めて重要な課題として捉えなければならないのは言うまでもない。

本学の学芸員養成課程の中で、博物館学内実習においては社会における様々な課題解決を目指したプロジェクト型の企画展示の実施を授業内容の中心に据えており、これまで実践してきた。大学所在地である宮崎県は、東日本大震災以降「次に来る」と予想されている南海トラフ地震によって大きな被害を被ると考えられている。だが、大規模な地震災害に対する備えとして地域住民の意識は以前より高くなったとはいえ、今ひとつな状況も存在するのは事実である。そうした状況において、隣接した県域で大規模な地震災害が発生した。この中で、災害と社会をキーワードとして学修活動の中に取り込んでいく事は、大きな意味があると考えている。

2: 学内実習の中で災害を考える

1) 熊本地震と博物館実習

現在の学芸員養成科目において、博物館実習は大学内で実施する博物館学内実習と、大学外で実施する館園実習(学外実習)に明確に定義されている。だが学芸員養成を実施している大部分の私立大学では学内に博物館がなく、設備も不十分であるので、学内実習には様々な課題がある事は否めない。多くの大学がそのような状況の中で実習を行っているが、本学では工学やデザインといった分野の学修活動で多く取り入れられているプロジェクト型学習(PBL=Project Based Learning)による活動を導入している。この学修についての実践と評価については以前にまとめている(山内利 2015a)。

この学修活動では、これまで地域社会における様々な課題を取り上げた企画展示を実施してきたが、過去のテーマ策定プロセスでは大まかな課題を複数挙げ、最終的に1つのテーマとして集約していった。ただ実習の授業時間が年間の半期であるために、この方法ではテーマが確定するまでに時間を取られてしまい、展示制作をより充実したものにするには短かった。

平成28年度もそうした例年と同様の授業展開を検討し、第1回授業日の4月12日には、学内・学外実習ガイダンスとこの日までに受講生に課しておいた課題発表を行い、翌週はテーマ検討を行う旨各自検討しておく様伝えておいた。実際、この時期までに既に各受講生はテーマをある程度固めており、後で確認

した所この授業以後一度自主的にテーマの話し合いを行っていたと言う。

熊本で最初の地震が発生したのは、2日後の14日であった^(註3)。地震の翌日、職場では熊本出身の学生・教職員をはじめ、全ての人々の心配の声が聞こえる中で通常通り授業が行われた。筆者は夕方には翌16日に国立国際美術館で実施される美術史学会のシンポジウムを拝聴するため、様々な不安を抱えながらも大阪へと移動した。16日の深夜に2回目の震度7の地震が発生したのを知ったのは明け方のテレビのニュースを観てからで、驚いてSNSを確認した。熊本だけでなく、さらに大分県側を震源とする地震までも発生している事実を知り、すぐさま慶長年間に西日本で発生した一連の地震(慶長大地震)との関係を思い起こさざるを得なかった。

16日の朝から実施された美術史学会のシンポジウム『境界／ボーダーを越えて—未来の学芸員のために』では開会から緊張した様子が伺え、主催者挨拶ではその段階で入ってきていた熊本県内・九州の各ミュージアムの情報が伝えられた。そしてなんと言っても筆者が最も緊張したのは昼前にスマートフォンが発した警報「日向灘で地震発生」というものであった。「頭から血の気が引くというのはこういう事か」とはっきりと悟った経験であった。とてもその場に座ってはいられず、一度会場を出て数分してからそれが誤報とわかった後も、不安は募るばかりであった。

様々な想像が頭の中を駆け巡り落ち着かないままであったものの、こうした場において自らがなすべき事をはっきりと定められたのは、東日本大震災で大きな経験をしてきたミュージアムと、その現場で活動してきた学芸職の言葉の重みであった。シンポジウムでの午後の発表、気仙沼リアス・アーク美術館の山内宏泰氏による「美術館の社会的必要性が問われるとき」という発表がそれで、氏は震災以前・以後に果たしてきた同美術館の地域社会に対する活動を紹介し、その中で「災害が発生してから初めて行動するのでは役に立たず、先に様々なルールを設定し、いざという時に動けるようにしておく」必要性を強調していた。この考え方は筆者自身を大きく突き動かした。すなわち、大きな災害の中で自らの専門分野の中で活動していく事こそが、被災地に隣接した地域に住む専門家の役割であるというその1点に尽きるのであった。

大阪から戻った翌々日の18日、被害の状況が今ひとつつかめないままではあったが、南阿蘇村や御船町方面を抜けて熊本市方面へ行く事は難しいだろうという事で、ひとまず宮崎県北部の未指定文化財である歴史的橋梁を確認し、それから阿蘇神社の状況を確認する事にした。自動車で国道218号の起点である宮崎県延岡市から阿蘇市方面へ向うには、高千穂町から途中国道325号を通過して熊本県高森町へ抜け、阿蘇外輪山を下って一旦カルデラへ降り、さらにそこから阿蘇根子岳の東側を走る国道265号ルートを越え、大分と熊本とをつなぐ国道57号へというコースを取る事が多い。しかし、325号線が途中不通である事がわかり、218号をそのまま五ヶ瀬町へ抜けてから高森町の外輪山を下るといふ、路線バスで使用されているルートを使った。途中の道路には所々陥没



写真 1:倒壊した阿蘇神社楼門 (平成 28 年 4 月 18 日撮影)

やび割れ、さらには土砂崩れが多く見られたが、阿蘇神社門前の商店街へ近づくと、一見、思ったより平穏にもみえた。

だがそうは言いつつも、阿蘇神社は既に報道で流れていた通り楼門と拝殿が崩壊し、それ以外にも被害の様子が窺えた (写真 1)。門前町商店街の建物は壊れているものもあれば、外壁は全く被害を受けている様でもないといった有様で、東北東から西南西を軸とした直線に、点線を辿るような被害状況を目視出来た。被害が活断層に沿っているという事は一目瞭然であった。筆者は、こうした状況を関係する機関に連絡した。

翌日の 4 月 19 日、博物館実習第 2 回目の授業において自ら確認してきた阿蘇神社の被害を説明し、受講生らが地震の際にどのような回避措置をとったかを話し合った。その上で今回の企画展示では「災害から生き残るためには」を主題とする事を提案した。先に述べたように、受講生達は 1 回目の授業の後に一度話し合っており、ある程度大まかなテーマを考えてきてはいたが、この提案をした時までは自分達自身が地震を経験し、特に熊本で早朝に 2 回目の震度 7 があった後、昼前にあった「震源日向灘」の誤報の後からこの日に至るまで宮崎県内でもパニックが継続し、さらにその後も物資が熊本へ優先的に割り当てられたので、スーパーやコンビニから水や食料品が無くなるという事態に実際に直面していたのであった。

そうした事から災害に対する関心は高くこの提案は容易に受け入れられ、受講生達は熊本地震に対する報道や自らの小さくともリアルな体験を基盤とした展示企画を立案していったのであった。

タイトルの決定は、目標を明確化する作業として極めて重要である。だが、今回は明確な主題をこちらから与えた事によって例年に見られるような抽象的

な課題を上手く具体化出来なかったり、そもそもの収斂が難しい大きすぎるテーマにしてしまって、それを削ぎ落としていく作業に時間をかけすぎるという事なく、展示そのもの企画化へと移行していった(註4)。

2) 展示を考えていく

議論の末、タイトルは企画展『明日は我が身—揺れる心、揺れる大地—』となった(写真2)。熊本の隣に住む宮崎県民にとって災害は彼岸ではない、と訴えるかなり直接的ではあるが、このストレートな意志が反映されたタイトルがそのまま市民にも伝わり、想像力が喚起されるのは今しかなく、今回はこれでよかったと考えている。タイトルが決定した後、限られた時間の中で展示構成や広報といった作業を考え・実行に移していく。例年どうしても難しいのは、短い期間の中で受講生が展示す

明日は我が身
—揺れる心、揺れる大地—

期間
7月14日(木)
～23日(土)
※19日はお休みです。
9:00～20:00
※23日のみ、18:00まで。

場所
延岡市民協働まちづくりセンター
1F 多目的フロア

ワークショップ!!
手軽に!簡単♪
防災グッズを作ってみよう!
16日(土) 14時～16時
17日(日) 10時～12時
14時～16時

入場無料

平成28年度 九州保健福祉大学薬学部薬学員養成課程 企画展

写真2:『明日は我が身—揺れる心、揺れる大地—』ポスター

る内容そのものに対して深い理解をはからなければならないという点である。受講生が学部学科で学修している専門に直接関わる内容を企画の中核に据えるという方法もあり、実際これまで、そうした専門に近い内容である野生生物や飼育動物をテーマとした企画展示も行ってはきたが、必ずしも展示を深化させる事につながっていたとは言えなかった。ある意味今回は、結果的ではあるがそうした学生の専門性から少し離れた内容にしてみる事による学修効果の確認にもなった。

作業の進展の中で受講生が最も体得していくのは、1つ1つの課題が生じた時に問題を明確に抽出して説明する事と、そのためにアイデアを持ち寄り、議論を積み重ねてよりよいものを作り上げていく事である。この時、安易な妥協で留まってしまう危険性は多いにある訳であって、その場合にさらなる問題点を提示して、よりよいものを目標とさせるのが勿論教員の役割でもあるが、時に受講生が教員の意図をどうしても理解出来ない場合もある。この理由は様々であるが、交通アクセスや諸インフラが限定されている地方に所在する本学の場合、受講生が大学生としてある程度の学修経験を経た段階での博物館への参加経験が限られてしまう点が挙げられる。残念ながら、地元市立館を除いて、興味ある展示があれば電車に乗って1時間程度でどこかの館園にいけるという

状況にはない。また近年では受講生の他の授業との関連で土日も集中講義や授業準備が入っていたりするので、学生が市外(多くは宮崎市や大分市になるだろう)へ移動する余裕も限られている。このように博物館への参加経験が限られる状況—すなわちミュージアムリテラシーの問題—が大きいという事が教員側でも理解されているので、現在は4年次前期の学内実習を受講する前の段階である春休みに課題を与え、できるだけ多様な館種の博物館への見学を促すようにしている。

そうした課題は織り込み済みとしながら、幸いにも災害に関わる様々な情報は東日本大震災以降文献・インターネット等に極めて多く存在し、これらは受講生にとって災害の被害に対する理解や防減災に関するアイデアとなり、展示にも活用されていった。特に今回の機会では体験型の展示を多く取り入れたり、来場者が自身の防災マニュアルとしても活用可能な冊子を制作出来た。これらは来場者からの評価も高かった。

ただし、企画初期の段階では受講生の地震そのものに対する知識・経験が不足していたり、また「伝える」という事の本質的な意味を消化出来ていない側面も強かった。

展示の1コーナーに「海岸に打ち上げられたメガマウスとダイオウイカ」のジオラマを設置した。これは深海生物が一時期に多く捕獲されたり海岸に打ち上げられたりするケースが大規模災害時の「前兆」として捉えられ、警鐘となる事をイメージしている。当初の計画ではこの展示をメインにしたいという方向で受講生の間では固まっていた。一つの考え方として、確かに普段眼にする事がない生物の発現を災害の予兆として捉え、それが人口に膾炙されていく現象自体は災害と社会を考える上では興味深い。しかし、企画作業が進み理解が深まっていくにつれ、「果たして今回の展示のメインにするべきか」という疑問が、受講



写真3:「揺れ」を再現する装置の試験



上_揺れを確認している様子
下_サスペンションとしてポリエチレン製ボールを使用した

生達の間で生じていた。この展示は残しつつも、より市民が日常生活で意識し、準備していけるような防滅災に関わる知識や知恵を提供していけないかとの志向が強くなっていった。宮崎県でも大規模な被害が予想されている南海トラフ地震を念頭に入れた津波からの避難や、現実に災害避難所で発生している様々な問題を取り上げる等、展示内容がより現実的なものに変化していった。

また体験型といいつつも、例えば震災クラスの「揺れ」を人力で再現する装置では、実際の地震の揺れ方を受講生が殆ど解らないという問題があった。これについては、たまたま阪神淡路・東日本の2つの大震災を経験し、さらに熊本地震でも災害支援活動で活躍している本学の教員がいた事から、開始から終止まで時間経過によって変化する震災クラスの地震の揺れ方を直接教示してもらった。そして体験時にはアイマスクとヘッドフォンを装着し、さらにフリー素材音源として再現公開されている地震時の警報と地鳴り音を再現時に聞こえるようにするといったオプションを加えた結果、人力でありながらも体感としての再現性が高い揺れが作り上げられていった(写真3)。

3) 災害体験を伝える

今回の企画では、受講生自身がまず災害のリアルを理解するという到達すべき課題を設けた。幸いにも震災を経験していた教員の他、受講生には近畿地方出身の学生が数名いて、保護者から阪神淡路大震災の体験を聞いていた。また、学芸員養成課程を受講していないものの、学生の中に中越地震や東日本大震災を直接体験した者が複数名存在していた。そこで、こうした体験者からのインタビューを行う事を考えたのであった。さらに、筆者がSNSを通じて知り合った熊本地震被災者のもとに受講生を連れて行き、被災地で直接話を伺う事も行った。この被災者からインタビューするという経験、そして被災地に実際に行って感覚的に災害を理解するという経験は、受講生が他者に伝える事を目的としながらも、自らが知る上で極めて大きなインパクトとなった。

災害体験者に対するインタビューについては、7名の受講生全員が関与可能となるように工夫した。中越地震・東日本大震災経験者に対するインタビューでは、インフォーマントが受講生と同じ学生である事を配慮し、教員はインタビュー時には関与せず、学生同士が会話し記録する形式を採っている。また、同インフォーマントがわからないように展示の際には配慮している。インタビューをする側もされる側もこのような経験はこれまで皆無であり、最初はこ

うした目的的な会話が上手に進まなかった様子であるが、やはり普段から会っている学生同士であるという関係が良好に働き、時間が経過するにつれ会話が進んでいった様



写真4：熊本地震被災地での被災者へのインタビュー

子が記録映像からはうかがえた。

熊本地震体験者については教員が SNS を通して災害以前から知り合っていたものの、この時まで直接的な面識はなく、さらには場所が被災地であるという事から、希望する受講生が任意で参加するというかたちを採った。熊本地震は極めて多くの余震があったが、この時期には既に大きな余震は殆ど収まっており(6月28日)、2次災害の恐れは少なくなっていると判断した(註5)。

実施したインタビューは以下の通りであり、一部は資料として巻末に添付している。

- ・平成28年、熊本地震の経験(熊本県での様子、6/28実施)(写真4)
- ・平成16年、中越地震の経験(新潟県での様子、7/5実施)(資料1)
- ・平成23年、東日本大震災の経験1(神奈川県での様子、7/5実施)(資料2)
- ・平成23年、東日本大震災の経験2(福島県での様子、7/6実施)

熊本地震被災地への訪問後、その報告を実際に現地へ行った受講生に実施してもらい、他の受講生はそれを聴くという機会を設けた。その際、展示に活用する資料として、インタビューを行った被災者からお借りした自宅の瓦礫を受講生の目の前に置いた(写真6上)。最初は拳大の小さなコンクリート片に過ぎなかった瓦礫が、地震2ヶ月後の現地の状況とインタビュー映像さらに報告を聴く事で、次第に存在感のある、重い意味を持った資料に変化していったのを受講生は目の当たりにしたのであった。中越地震・東日本大震災被災者へのインタビューは、この熊本地震の情報を得た後に行っている。

以上のような経験は、受講生に大規模災害に対する深い理解を与え、展示制作をより内容の濃いものに深化させていった。

3：実際の展示を行う

1) 企画展示を実施して

企画展『明日は我が身―揺れる心、揺れる大地―』は平成28年7月14日～23日の間(うち1日は休館日)、宮崎県延岡市に所在する延岡市民協働まちづくりセンターを会場として開催した。毎年度の企画展示でこの会場を提供してもらっているが、同センターは延岡市内の市民活動団体が多く活用する施設であり、医療・福祉・住環境といった地域社会の様々な問題、伝統芸能・祭り等文化活動を運営する諸団体が集まっている。また、読書会やサブカルチャー関連の市民サークル活動もここで行われている。そうした場であるので、ここを拠点に諸活動に関わられた方々が展示会場へ顔を出し、様々な観点から意見を得られる可能性も高い。実際にこれまでもそうした事が毎年度あって、実習受講生が市民知を学外で得られる貴重な場であると理解している。

会場での展示準備、あるいは展示を運営してみてもはじめて理解し、時に改善・修正を加えてよりよいものを構築していく経験は、受講生が擬似的ではあるが

「現場」を知り、机上で組み立てていた計画とのギャップの存在を明確に認識していく過程である。この間隙を自分達の手でどこまで埋められるかに尽力し、達成感や限界を身をもって体験する事で極めて高い学修効果が認められるのである。何よりも目標としているのは、受講生に将来同じような課題が生じた場合に、今後の解決方法のプロセスを一通り理解しておけば、次に自らが果たすべきミッション・為すべき作業とその行程・工程を組み立てられるようになっていける、そうした能力の養成を目指している。

会場と大学を何度も往復し、より効果的な展示を目指して計画・制作してきたにも関わらず、どうしてもイメージとは異なってくる。美術や工学といった分野とは異なる学部学科に所属する本学の受講生には、このような経験をする事が殆どない。せいぜい、プレゼンテーション用のパワーポイントか、オープンキャンパス時のパネル作成程度であり、いきなりこの授業で企画者の意図と来場者の視線の効果的な融合を意識した「ものをつくる」という経験に向わなければならない。特にこれまでそうした経験のフォローアップでもあった学芸員養成系の科目のいくつかは、平成28年度からは本学でのキャップ制導入によってこの実習と並行する4年前期または後期に開講となったので、学修方略の意識的な変更も考えていく必要性が生じていた。

展示全体の構成は受講生全員によって決めていくが、展示の流れを構築するパネルについては文体を統一する必要もある事から、ほぼ1人の学生が基本となる原稿を考えていく(写真5)。例年、展示企画策定の議論で主導的な者が他のメンバーからの推挙でこの役割を担っているが、平成28年度もそうした傾向であった。もちろん展示全体を牽引していくパネル原稿を作成していくのは容易ではなく、そうした経験もない。自分の文章を仲間や時には見ず知らずの人達から批評されるのは「針のむしろ」に座らせられた気分だろう。この原稿作成に関して教員による指導・修正はいくらでも可能だが、あえてそうするのはなく、ここでは介入を最低限に留める事を心掛けている。無論、言わば「身内」ではない外部からの評価を受けてもらうために他ならない。

大学博物館等の施設を持たない本学で行ってきたこれまでの展示では、どうしても実物資料を直接扱う経験が不足する。この点において、今回は被災した「現場」から借用してきた素材が資料としての価値を有し、それを展示する作業を組み込めたという意味で学修経験の改善にもつながったと考えている。単なるコンクリート片に過ぎなかったはずのこの1つの資料を扱ってその背景を描き出し、来場者にその意味と価値を理解してもらおう目標を掲げ、より充実した展示へと昇華させている。

日常生活の中で何気なく使っている道具や様々な設備・施設が、被災した事で価値を見い出され、その被害を伝える役割を担っていくという機能についてはよく知られている。東京両国の復興記念館では関東大震災によって被災した資料が現在まで遺されている。同記念館、さらには広島・長崎の両原爆資料館をはじめ日本各地には第2次大戦期の被爆・空襲資料を展示している施設が

避難所生活

熊本地震での避難者は4月17日時点で最大183,882人。^{*}
 避難所や体育館には被災した人々が押し寄せ、混乱をきたした。

水や食料といった、生きていく為に必要な物資
 着替えや下着といった、衛生面で大切な物資も不足し
 1週間入浴も着替えもできないという苦しい避難生活を強いられた。

*人と防災未来センター 2016.5.6「平成28年(2016年)熊本地震現地調査報告(第1報)「DR」調査レポート」No.45

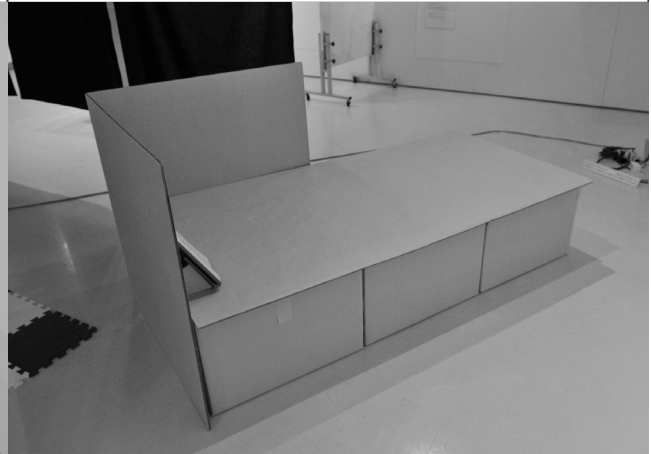


段ボールベッド

「エコノミークラス症候群」

飛行機内や、限られた空間の中で長時間同じ姿勢を取り続けることで発症する。静脈などに生じた血栓(血の塊)が体中の血管を巡って肺へと流れ付き、呼吸困難や、死を招く病気。

小さい子供や、ペットを飼っていることで車中泊を選んだ人にはこの病気で亡くなった方もいる。



そんな中多くのペットも被災し、人間の飲み水が無い中で犬や猫に与える水は圧倒的に足りなかった。
 ペットを飼っている人からすれば、例えば残りの水が少なくても家族同然のペットに水を分け与えることは当たり前の事だ。

しかしここにも問題があった。

動物が嫌いな人やペットを飼っていない人には理解できず「人間が飲む水も足りないのに何で犬に水を飲ますんだ」などの意見が出たのである。

*産経ニュース 2016.4.25「人の水もないのに犬に飲ませるのか?」
 ペット同伴避難でトラブル相次ぐ 唯一のペット避難所は…
 毎日新聞 2016.5.12「避難所で迷惑になるから」ペット連れも車中泊

女性の生理用品

ある避難所では生理用品の供給があったにも関わらず一部の男性が「生理用品はなくても支障のないもの」と誤った認識をしていたために、その物資の受け取りを拒否した事例があった。配給所にいるのは男性ばかりでもらうに行くのをためらい体調を崩してしまう女性も数多くいた。

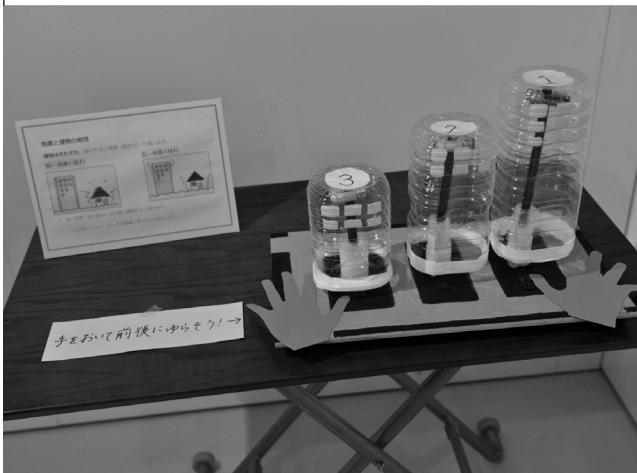


写真5: 展示パネルと、体験型のオブジェクト

(写真上は避難所で使用されるダンボールベッド、下は建物の高さによって揺れの状況が異なる事を表す装置)

ある。雲仙普賢岳の噴火によって火砕流に飲み込まれた島原の街は、災害遺構を積極的に展示活用して復興にも貢献させている点で先駆的である。阪神淡路大震災では、人と防災未来センターをはじめ兵庫県内を中心としたいくつかの施設において震災資料が収集・展示されている。災害以前から資料的価値を付与されていた博物館資料や博物館以外に所在する様々な文化遺産の被災が大きな問題となったのもこの時である。そして阪神淡路大震災では被災資料の範疇が戦災資料と比較して拡大され、一方でこれらが震災に関わる資料として統合的に理解されるようになった。中越地震、そして東日本大震災ではこのフレームはさらに拡大されていく。それは被災した博物館資料や市井の文化財をレスキューする活動の様な専門分野にとっての注目もさる事ながら、震災遺構や思い出の品といった対象を遺していくという考え方の、一般への浸透にも認められる。津波で陸地に揚がった船舶や遺された建造物の保存問題が早くから注目を浴び、被災した写真を洗浄して持ち主に返却する活動や被災地の状況を伝える写真展示が被災地各地のみならず全国的にも拡大したのは、災害の記憶を共有していく人々の意識のあらわれに他ならない。民俗芸能を遺していく活動自体が、地域コミュニティの存続と深く関わっている点もこの震災を通して広く知られていった。この震災に関わる様々なデジタルアーカイブズが生まれ、支持されていったのも、根本的に遺し・伝える行為がその土地その土地で生まれてきた多様な文化や社会、住民の生存に深く関与している点を多く人々が共感したからに他ならない。

様々な対象や方法によって「遺す」という行為が行われてきた背景には、対象が持つ「記憶」が過去を振り返り、さらに未来へ向うためには必要不可欠であると考えられている点が存在する。「記憶」は表現行為の中では最も重要なテーマのひとつであるが、表現を重視する博物館としての美術館の活動において、遺す—伝えるが一体性を持って表されていた。先に館名を登場させた気仙沼リアス・アーク美術館の震災展示はこの代表的なものと言えるだろう。同館と、震災に関わる展示活動を最初に知ったのは、平成 25(2013)年に開催されたあいちトリエンナーレ 2013における愛知県美術館での青野文昭氏の作品展示であった。氏は震災以前から「なおす」をテーマとした作品を制作し、これらはリアス・アーク美術館や宮城県立美術館において展示されてきた。作り—使われ、そして使われなくなった日常品には、様々な傷や部位の欠損がある。博物館において修復とは、資料の劣化進行を食い止めて元の状態に戻す意味で使われる言葉だが、氏の作業としての修復はそうではなく、モノを別の何かに変容させてしまう創造的な作業を意味する。モノは修復されたとしても決して元と同じ状況には戻らない。そこにあるのは新しい場であり、意味であり、社会である。氏のテーマは 90 年代から継続されてきたものであるが、震災を経てこうしたメッセージが絶望からの希望を渴望する世情にしっかりと当て嵌まってしまったとも言えるだろう。

歴史的にみると美術品の修復は作家の制作活動の一環として行われてきた。

作家にとって修復作業が古典技法を学び、新しい作品を創り出す手段として大きな役割を果たしてきた事実は昔から現在まで変わりはない。この点においては氏の「なおす」活動が、美術品修復を表す一般的な意味での修復活動とも一本の線であつてくる。あいちトリエンナーレでの展示からは、被災した日常生活にかかわるモノを1つの作品として取り込み、眼前に実体として迫ってくるイメージが強かった。作品に内包されたモノに痕跡付けられた1つ1つの傷跡や部位の欠損からは、震災によって失われていった人々と土地の記憶が観ている者の脳裏に蘇ってくる。実際にはその地へ行った事もなく、これを使った人と面識もないはずであるのに、我々はずっと彼らや彼らの住む街を知っていて、長い期間見続けてきていたかのような錯覚にも陥るのだ。

平成28(2016)年2月には、同氏の作品が展示されている気仙沼リアス・アーク美術館を訪れた。美術館でありながら歴史・民俗系の資料を多く収集・展示している同館の、震災以前から蓄積されてきた気仙沼の豊かな民俗誌を飾る様々な資料を観た後、津波災害の記憶を継承していく事を目指した活動と震災以降の展示を見学した。日本の博物館の多くでは、災害の記録は客観的事実を示す事象として扱われている事が多い。しかしながら『東日本大震災の記録と津波の災害史』と題された同美術館での展示は「主観的事実としての記憶」^(註6)であり、「東日本大震災をいかに表現するか」を目指し、これを「地域の未来のためにどう活かしていくか」をテーマにしていると言う(山内宏2015)。壁面には震災直後から撮影された気仙沼を中心とした被災状況の写真があり、床面には「瓦礫」として扱われ処分されてしまう様な、この街で生きてきた人々の生活—人生と密接であった傷付き・曲りくねり・欠けてしまった様々なモノ(「被災物」と名称付けられている)がいくつかの纏まりとして展示されている。さらにこれらの資料には「作品」名を示す赤いタグと、解説となる白い葉書が附され、後者にはこのモノ達を使っていた、想像された人々のストーリーが記載されていた^(註7)。観た者にとって、この展示は震災と津波の記憶を幾度も幾度も再生させていく装置として構築された明確な強い意志を受け取る事が出来る。

筆者は東日本大震災の後、この未曾有の災害が遠く離れた宮崎でも同様に起こりうるのだという事を伝える活動を、意志を共通する人々と協力して実践してきた(山内利2015b)。しかしながら、こうした取り組みが人々の意識の中にどれだけ根付いたかと改めて考えると、極めて限定的であったと言わざるを得ない。過去の災害記録を基にした歴史記述の難しさを身を持って感じているのだが、ではそこからさらに一步踏み出した表現は可能なのか。青野文昭氏の作品やリアス・アーク美術館の展示を観て、「客観」というブレーキをかけたつも「表現」というアクセルを踏み込んでいく迷いの中で、伝えるべき事象とは果たして何であり、それは誰に、そしてどのような方法なのかと、行き戻りを繰り返さざるを得なくなった。本来それは、災害という出来事であり、それを土地土地の人々に将来にわたって伝えるという明確な目的があるにも関わらず、である。

例えば我々は戦災を含む様々な災害の記録を観る度に、そこで生きてきた人達が、災害の後果たしてどうなっていたのだろうかと思ひ浮かべる。ある都市の博物館を観た後、復興を遂げすっかり変わった市街地を歩きながらも、どこかに災害の痕跡を探そうともしてしまう。これは時間をかけて癒されていった他者の傷跡をあえて穿り返そうとする行為なのかもしれないが、一方でそれが少しづつ風景から失われ・人々の記憶から忘れ去られてしまう中に憂いを感じていた。近年、著名な観光地という訳ではない土地でも「まちあるき」が行われ、古地図・古写真が再評価されているのにもそうした背景がある。

東日本大震災を通じて、過去の災害の記憶には未来の脅威に対処すべき力がある事が周知されていった。従って過去の災害の痕跡を辿る行為にもお墨付きが得られたと自分に納得させ、東北に限らず、日本の幾つかの被災地を歩き、そうした痕跡を訪ねてきた。熊本地震の後も、いずれは災害の伝承と周知化に関わる課題が生じてくるのは明らかであった。

かくして被災者から提供された「瓦礫」として扱われてしまうコンクリート片は、後世に熊本地震による災害を伝えていくべき力を持つと看做される1つの資料へと変容していく(写真6)。博物館実習受講生は災害のリアルに近い場や経験談に触れるプロセスを経て、「資料」という概念を実感していく。その上でこの資料を扱い、展示に結びつけたのであった。

2) 学修としての展示から何を得られるか

フィールドワーク等の活動への参加が難しくなっている近年の学部学生にとっては、自ら「資料化」を経験する事は当初から専門家によって価値付けられている資料を扱うのに比べて高い学修効果が期待出来る。そしてさらに、活動は資料化を経験して終りという訳ではない。実際の展示活動を行い、展示期間を経過し、評価までを含んだ「運営」をこの先学修していく。

学生主体の展示活動は、正直集客という側面においては期待が難しい。これは開催場所や土地柄・市民の関心・広報活動の限界等様々な要因が考えられるが、最大の問題は時間をかけて練られた企画ではないので、どうしても拙速にならざるを得ない点にある。もちろん、半期の授業でありそもそも集客を目的としている訳ではないのだが、この課題は受講生のモチベーションに影響してしまう。同じレベルの内容であっても人口の多い都市部で開催すれば、また違って来るのだろうと思う事も度々ある。しかし、それでは大学の所在する土地の人々に観てもらふ目的には適わない。過去には地元市民のニーズにたまたま合致した企画を行えた年度もあり、この時は多くの来場者を迎える事が叶った。しかし、博物館における企画は必ずしも地元民に迎合するばかりではなく、むしろ人々に対して社会に存在する様々な課題や世界の見取り図、あるいは人生の縮図のようなものを提起し、時には何らかのアクションを興すべくリテラシーを涵養していくのが1つの理想であると考える。

いずれにしても、学修の過程にある受講生には何らかの理想的な目標を求め



写真 6: 益城町の「瓦礫」

(単なるコンクリート片が意味のある「資料」に変容していくプロセスを、受講生達は理解していった。)

ながらも、一方でそこに向う道は様々であり必ずしも一辺倒のルートしか解決策はない訳ではないと、どこかで気付き・自ら理解していけるような筋道を付けているのだと理解してもらいたい。

企画展示期間中、受講生には様々な気付きが生まれている。それは企画や展示制作時から引き続く仲間との連携もさる事ながら、来場者という他者からの視点がやはり大きい。実際に展示をオープンしてみると狙っていた動線や立ち止まる視点が自分達の意図とは異なっていたり、目指していた理解とは違う理解をされてしまったりと、想定の外側にある経験とショックをここで味わうのだ。折角つくったパネルが時間経過とともに剥離したり、体験型の装置が思ったよりも簡単に壊れてしまったり、何よりも考えていたような展示デザインが未だに出来上がっていない。様々な事態にどう対応していけるのか。自分達がどこまで納得していけるのか。こう考えるようになった時点で、彼ら彼女らがすでに多くの授業で見せるような「やらされ感」からはかなり遠くに立っていて、自ら考えるのを当然とする位置から物事を俯瞰し、さらにその中へ飛び込んでいけるようになっているのがうかがえる(写真7)。そしてすでに補助輪を取り外して走り出している一人一人の人間達に対して、指導する教員の側に求められるのは「口を出さずにどれだけ我慢出来るのか」である事も毎年痛感するの

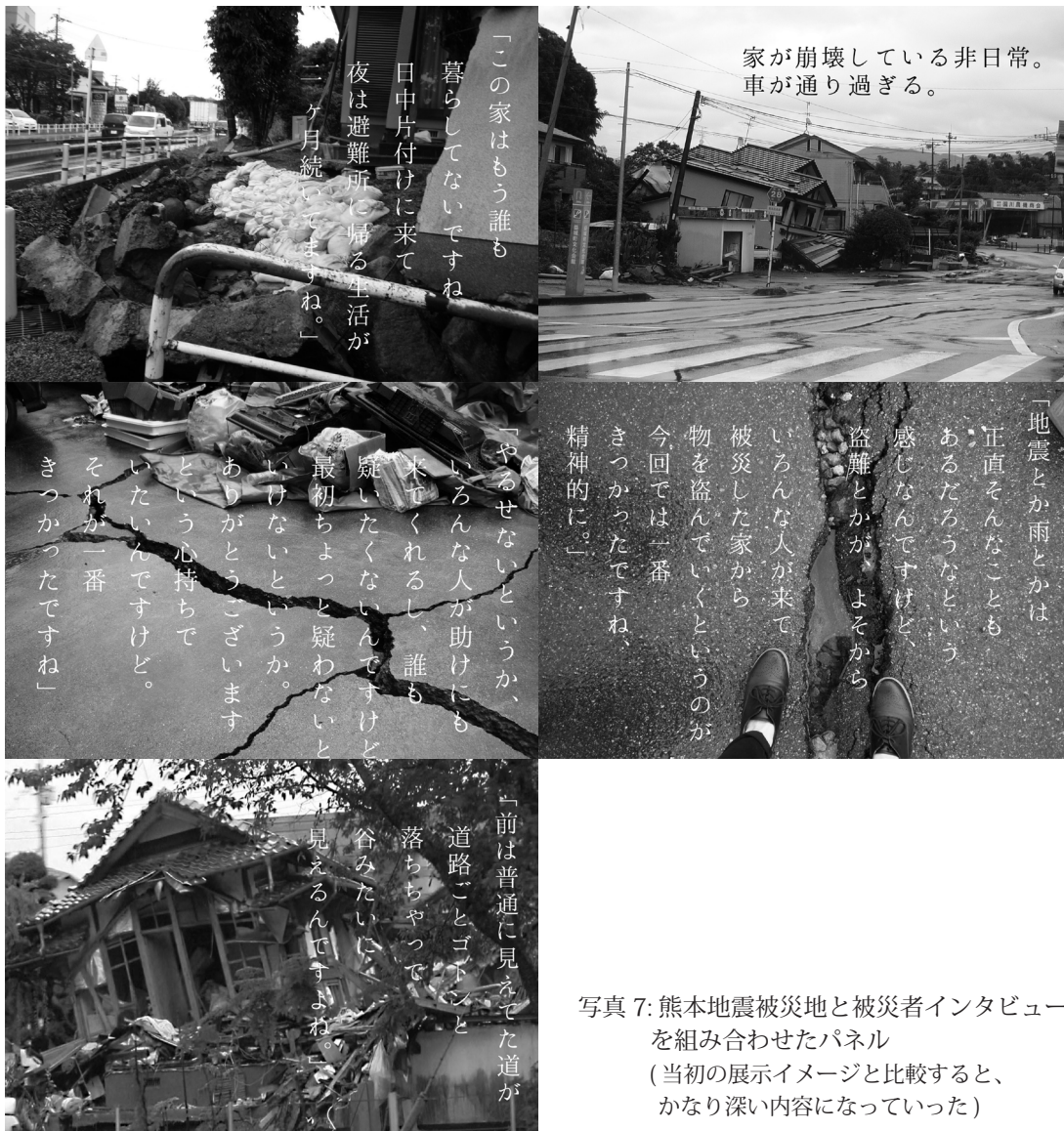


写真 7: 熊本地震被災地と被災者インタビューを組み合わせたパネル (当初の展示イメージと比較すると、かなり深い内容になっていった)

である。

展示が終了した後、受講生は展示企画の評価活動を行う。ここで自らを振り返り、到達地点を確認する訳であるが、なんと言っても目的として後輩達に自分達の試行錯誤を継承させ、活かしてもらおう事が挙げられる。実際の所、跡を継ぐ人間の出発点は再びゼロからであり、その時点では先に通った者達の活動をなかなか理解するのは難しい様子ではある。しかし、災害の記録・記憶を継承していく視点がここに加わった時点で、活動の継続にも力点を置いていくべきとも当然理解している。

4: 継承していく事、その意義

災害の記憶・記録を継承し、将来同じような事態が起こりうる可能性を広く伝えていく活動は、大規模災害が頻発する現在において、防滅災の一環として否が応にも考えていかなければならない課題であり、実際に多くの博物館がそうした活動を意識し、時にはそこに社会における存在意義を見い出している。

また、東日本大震災以降、大学教育の中でも防災教育の実践事例が増加してきており、これは2つの震災被災地のみならず、特に今後の大規模地震災害が予想されている太平洋沿岸部に所在する大学において実施例が多い。宮城教育大学では仙台藩が天災・飢饉時に備えて奨励した救荒植物の育成を再評価し、「食べられる植物」に関する知識と技術を学生に理解させ、災害から「生き抜く力」を身に付ける事を目標とした環境教育が実践されている(溝田・鶴川 2016)。神戸女子短期大学では生活と関連の深い家庭科の教員養成科目の中で震災への備え・防災をグループワークによって見い出させている(古田 2016)。90分1回の限られた授業時間内において「想定年齢70歳女性の必要な品を決めるのは18歳や35歳を想定するより難しい」(同 p.53)と多くの学生が理解したのは、それだけで大きな気づきを付与している。南海トラフ地震で甚大な被害が想定されている高知県の高知大学では、地理学教育を基盤とした防災教育を実施している(中村 2016)。ここでは地理的な理解や考え方による防災学修の効果と課題が検証されているが、自然災害リスク概念のレベル化に際して、受講生の学修前後の習得状況の比較が必要であると言う。近畿大学では、仙台平野で採取された津波堆積物の土層剥ぎ取り標本を活用し、標本観察の前後での受講生の防災意識変化をコンセプトマップを活用して明らかにしている(吉川 2016)。その結果「本授業により自然災害に対する関心の向上はみられたが、自然災害から身を守ることやその具体的な行動に対する意識に対しては、本授業が十分には作用して」おらず、これに付加して「防災のスキル等を学ぶ授業につながる防災準備に対する意欲づけを担う学習活動をきちんと位置づけていくことが、防災教育の基盤をつくる学習活動として重要」であるとしている(同 p.41-43)。

限られた期間、様々な学修項目を盛り込む必要がある学芸員養成課程において、社会のニーズと言えども果たしてどこまでこの事に関与し、組み入れていくべきかは機会ある毎に問われねばならない。出来る事は限られてはいるものの、学芸員養成課程を受講した学生にこうした意識を生涯にわたって持ち続けてもらう事、先輩から後輩へと自分達が実践してきた活動を受け継がせる意識/受け継いでいく意識を構築していく事の2点は外せないと考えている。同じ学芸員養成課程の講義である博物館資料保存論では、災害時における博物館の対応としての資料保全活動や安定化等の処理について講義する機会はある。しかし、被災地の博物館はそれだけではなく、館種を限らず災害を通してその土地その土地で過去にあった様々な出来事やそこに住む人々の様子、災後から回復していく自然環境や災害を伝えようとする様々な表現を我々に伝えている。そうした活動と意義は学芸員養成課程科目を履修している段階で理解していくべきであり、可能であるならば履修の早い段階から知っておいても損はない。学内実習を実施する段階以前でも、防滅災を視野に入れた災害の記憶の継承をテーマとする内容を授業の中に入れていく事は可能であろう。また、今後は熊本地震で被災した各種博物館が、同地震災害との対峙を様々な方法で取り上げる機会も出てきており、被災県に近い本学でもこれらを学修の中に取り入れていく

事は十分可能であると考えている。

もちろん、宮崎県も様々な災害に見舞われてきた地域であり、地震・津波災害だけでなく、九州地方に多い火山噴火や風水害、さらには家畜感染症に関わる被害の記録とその記憶は、公的なものだけでなく市井にも多く遺されている。我々は地域社会に蓄積され、場合によっては埋もれつつあるこれらの情報から、大規模災害という重要な課題に対峙し、取り組んでいく姿勢を受講生達とともに考えていきたい。

註

- 1: 宮崎県では平成 22(2010) 年に口蹄疫による大規模な家畜被害を経験している。当時筆者の所属する大学においても畜産農家家庭の学生がおり、大きな苦痛を味わっている様子を見聞きしていたのは記憶に新しい。だが家畜伝染病による災害は、一般の学生が社会的活動としてのボランティアに参加する機会につなげるには極めてハードルが高かった。
- 2: 同じ宮崎県内から東北被災地へ学生ボランティアを送り出した大学も存在するし、本学でも熊本県出身の学生達による募金活動が行われている。だが本学で最も難しかったのは教育カリキュラム上の難しさと予算確保が難しいという現実的側面もさる事ながら、支援を引き出す事へつなげられなかった筆者の力量もあるだろう。
- 3: 筆者は 4 月 14 日、最初の震度 7 の地震が発生する直前の警報をテレビのニュース視聴中に見聞きし、この警報が熊本を震源とした九州地方に向けたものである事からガス等を確認して急いでテーブルの下に潜り込んだ。一瞬、震源は熊本ではなく地震の比較的多い我々の住む九州東岸・日向灘の誤りではないかとも考えた。その間 10 秒にも満たなかったが、続いて頭に浮かんできたのは前年に行った避難訓練での危機感のない学生達の様子であり、果たして早急な回避行動が取れているのだろうか、という事であった。映像が切り替わり、土煙が上がり瓦の落ちていく様子が映し出された。熊本の写真師である富重利平が明治初年度に撮影した熊本城の写真を思い出し、撮影された以後に西南戦争で炎上したこの城の歴史を想起さずにはおれなかった。さらには第 2 次大戦後に復元され、古い城下町を下敷きとした都市計画が推進されていった高度成長期以来の地方都市である熊本の街の象徴が崩壊してしまうのか、とも考えたのであった。そしてまた、熊本にはゼミ出身者をはじめとした教え子や知人もおり、この方々の安否が大変気になったのは当然であった。
- 4: この辺りは受講生のこれまでの学修経緯等を確認しつつ配慮していかなければならない微妙な側面があるだろう。場合によってはこの部分の推敲に大きなウェイトをかけさせなければならないケースもあると考えるが、過去の実習では時間を獲られすぎる場合が多かった。
- 5: 気象庁地震火山部の統計によると、4 月 14 日 21 時から 11 月 30 日 24 時ま

の間で震度 5 弱以上の地震は 24 回発生しているが、同 5 弱は 6 月 12 日以降発生していない。また震度 4 の地震は 11 月にも発生しているが、6 月段階では既にピークを越えて発生は殆どない (気象庁地震火山部 2016)。

6: リアス・アーク美術館「東日本大震災の記録と津波の災害史 (1F 常設展示)」内の、「Ⅲ. 展示内容について」の文中に記載されている言葉。

<http://rias-ark.sakura.ne.jp/2/sinsai/> (平成 29 年 2 月 20 日確認)

7: 展示された白い葉書に書かれた文章を読むと、「被災物」を実際に使っていた被災者から得た話のようにも伺える。しかしこれは「震災後に様々な被災者と語り合う中で得られた物語をベースとして筆者が創作したものであり、「このような文を展示資料に添えるという発想は、博物館学的、展示学的に考えて異例のことだと自覚し」ながらも、「このタブーをあえて犯した」(山内宏 2015,p.150) と言う。

参考文献

気象庁地震火山部 2016 『平成 28 年 (2016 年) 熊本地震』の震度 1 以上の最大震度別地震回数表』気象庁

古田貴美子 2016 「女子短大生に対する防災教育の取り組み—グループワークによる授業の実践—」『神戸女子短期大学紀要 論攷』61 巻 p.51-57 神戸女子短期大学

中村努 2016 「大学共通教育における防災教育授業の実践」『高知大学教育学部研究報告 第 76 号 p.27-35 高知大学教育学部

溝田浩二・鶴川義弘 2016 「救荒植物を活用した「生き抜く力」を育む環境教育の実践」『環境教育研究紀要』第 18 巻 p.1-9 宮城教育大学環境教育実践センター

山内利秋 2015a 「学芸員養成における課題解決型教育」『博物館学雑誌』41-1,p.21-39 全日本博物館学会

山内利秋 2015b 「宮崎歴史資料ネットワークの活動と課題」『全国史料ネット研究交流集会 報告書』p.50-54 科学研究費補助金基盤研究 S 「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて」研究グループ

山内宏康 2015 「展示解説「地域の歴史・文化と未来を守るために」～リアス・アーク美術館常設展示『東日本大震災の記録と津波の災害史』での試み～」『リアス・アーク美術館常設展示図録 東日本大震災の記録と津波の災害史』p.149-153 リアス・アーク美術館

吉川武憲 2016 「津波堆積物のはぎ取り標本を用いた大学の授業に対する防災教育の視点からの評価」『近畿大学教育論叢』27 巻 2 号 p.33-44 近畿大学教職教育部

(資料1)

平成16年新潟中越地震を経験して

A = 情報提供者 (新潟県出身、平成16年新潟県中越地震を経験)
聞き手 (佐賀県出身)

— 中越地震では土砂崩れとかがあって、大きな被害がありました。以前に車中泊してたって聞いたけど、やっぱり色々大変だったの？学校の様子とか。

A:(地震の) 次の日に学校の教頭先生が安否確認で見回りに来てくれて。車の中にいたらトントン、「大丈夫でしたか？」と。学校は大丈夫だったけどずーっと休みだった。1ヶ月位だったかも。久しぶりに友達と会えた時、「みんな大丈夫だった？」みたいな。小学校4年だった。

— 熊本地震の時は私もテレビ観ていて、急にアラームが鳴り出したからびっくりした。車中泊を1ヶ月ぐらいやっていたって事でしょ？御飯とかはどうしていたの？

A: 近くにあるお寺の人がおにぎりを配ってくれたりとか。あと、とりあえず腐るからって冷凍庫のものを全部出して食べた。

— 常温で溶けるからか。近所の人も避難してた？

A: そうだね。避難所っていう避難所が近くにはなくて、皆大体車の中だったりとか。

— やっぱり、身体痛くなった？

A: うーん、子供だったから、まだ若かったから大丈夫だった(笑)。今だと多分しんどいわー。

— お父さんとお母さん、弟さんは大丈夫だったの？

A: うん、大丈夫だったみたい。弟がいて、私が小4だったからまだ幼稚園だったと思う。車の中でずっとゲーム。充電がなくなるまでとりあえずゲームしていた。充電がなくなってからがきつかった。

でも地震が来ない時はちょっと外をふらふらとして。大丈夫かなって。家の中から必要なものを全部運んだりとか。家は瓦が落ちたりしていたけど。

— ブルーシートをかけている感じみたいなの？

A: そうそう。でも、屋根に登るのも危ないからそのままだけど。あと、家の中全部ひびが入って。

— Aちゃんの地域って震度6位？

A: 6弱。

— (熊本地震で)延岡は5ぐらいだったけど*、6だとひどいよね。

A: 今でもその壁は放置。崩れないから大丈夫だと思って。お風呂だけ直して壁は今もひび入ったまま(笑)。

— ペット飼っていたよね？

A: そう、イヌ一匹、ラブラドルがいて、車の中で一緒にいた。

— ペットと車の中にいて、体育館とかに避難しようとは思わなかった？

A: 体育館まで結構遠かったし…。イヌはストレス感じている様子でもなく、割とけろっとしていた。

— 新潟と言えば修学旅行でスキーしに行ったんだけど、そんな地震で大変だったって面影はなかったなあ。何が一番大変だった？精神的な意味でも、体力的にも。健康面でもいいし。

A: きつかった事…。授業がないのはすごい嬉しかったけど、友達に会えないのが。遊びたいなあ、みたいな感じがあって。

— 友達もほとんど避難してた？

A: うん、そうだね。あんまり会う事がなかったから。たまに避難警告が出てお寺の所に集まるとかはあったけど。あとは断水してたから。電気もずっと使えてなくて停電。水は配りに来てくれる人がいて、多分自衛隊のだけど。それで、水もらいに行って。

— そういうの私、あんまりよくわかんないんだけど、水って皆に平等に分けられるの。それとも家族の分だけもらえるの？どんな感じ？

A: 大体平等だったかなあ。

—— トイレは一緒になるの？

A: うちでは自分の家に戻ってしてた。お風呂に水が溜まってたままだったから、それ使って流してて。家は全部崩れている状態じゃなかったから。

—— 半壊とか全壊とかじゃなくて、家具が倒れていた位だけ。

A: そう、(家具が) 倒れて、ひびが入った位。だけど今でもそのまま使っているから。大丈夫だったんだろうと思う。あと酷かったのは道が全部崩れていた。なんかもう、ガタガタガタみたいな感じ。全部ひび入ってて、崩れてたみたいなのはあった。近くの道路は大体そうだった。

—— 川とかも大丈夫だったの？

A: 家の近くに池があるんだけど、池が崩壊するので避難しろという話があった。ちょっと高い所にあって、それが崩れるかもしれない、水が流れてくるかもしれないから気をつけて、という話があって避難したけど、結局大丈夫だった。

—— 揺れはやっぱり恐かった？

A: あ、でも結構避難訓練が小学校であったから、それですぐにぱっと「机の下隠れる」みたいなのは条件反射で出来た。余震も結構あったね。

—— 私は今回の(熊本)地震でとても揺れが残る感覚があって。身体が揺れているのか地面揺れているのがわからなくなって。そういう感覚って新潟でもあったの？

A: あったあった。でも、(中越地震では) 割と大きいのが何回か来ていたのか、段々慣れてくると「今の震度何」とかってわかった。で、弟とラジオ聴いて合っていると「よし」ってゲームみたいに。

—— ラジオはあったんだ。

A: そうそう。ラジオはたまたま見つかったからそれ使ったりとか。地震の次の日に近くのコンビニ行ったら開いててくれたので電池を買いに行って。それ以外も車にラジオついてるし。

— 車はガソリンとか大丈夫だった？

A: 丁度燃料入れた次の日に地震だったから。大丈夫だったみたい。でもそんなに遠くまでは移動しなくて、家からちょっと離れた周りは何もないような所に車止めて。で、そこでずっと過ごしていた。うちの車は結構大きかったから割と大丈夫だった。

— 食べる物に困ったりはしなかったの？

A: 食べる物に困った事はなかったなあ。割とお母さんが用意周到な人で、カップ麺とかを安い日に大量買いしちゃったり、カセットのコンロを使ったり、バーベキューのセットとかも車庫にあったから、それを使って何でも出来た。割と準備がよかった。

— 苦労はしたと言えはしたのだろうけど、他の人と比べればそんなに苦労はなかった。

A: そうね。周りの人も呼んで、一緒にやろうという感じだった。一緒に御飯食べようって。あと、畑があるからその畑のものを採ってきて。割と田舎だから。

— 家の壁壊れたって事だったけど、気持ち的にはどんな感じなんだろう？私はそういうのは怖い。

A: 気持ち的に ..、凄いなあって感じ。家って結構脆いんだなあって思った。うちはそんなに壊れた訳じゃないし。友達の家とか割と全壊しちゃったりとか居たのに比べると。

— 全壊 ..。その子もやっぱり車の中？

A: あ、その人近くの人と一緒に居たりとかしてた。

— 仮設住宅とか造られる訳だけど、そういう所に行こうとは思わなかったの？

A: うん。今住んでいる場所をあんまり離れたいとは思わなかったから。

— 話を聞くとイメージとは全然違う (リアル)。

A: 結構援助をしてもらってて、色んな人達がお見舞いを送ってくれたからあん

まり困らなかったかなあ。

— 避難する時何持って出たか覚えてる？お母さんから「避難に行くよ！」みたいな感じだったとか？

A: ちょっとやばいから出ようかあ、みたいな感じで。ただ、車の上に瓦が落ちてきたりしているから「やばいやばい」と思って、布団被って外出た。上から落ちてくるかもしれないから、すぐに出ないでちょっと治まってから。でも、親の凄い所はまず戸棚とか全部開いてそれをガムテープで止めてきた。戸棚から食器落ちたら危ないというので、まず戸棚を全部ガムテープで止めにしていた。

— 元々災害とか結構意識している家族だったの？

A: いやー、もし皿とか落ちたら片付けなきゃいけないじゃない？それは面倒くさいってなったのと、割れたらその分勿体無いからってのがあったと思う。

— 対応力すごいな。

A: ねえ。怖いよねえ。私は「行かないで！」って泣いたのは覚えてる。

— やっぱり、恐かった？

A: だって危ないじゃん。恐いなって思った。けど母親強いなって。

— お父さんは？

A: お父さんも一緒に行ってたよ。丁度その日鍋で。夕飯時だったんよ。御飯がはじまる位だったんよ。で、鍋してて、鍋を避難させてたよ、お父さんが(笑)。柱をちょっと引っ張って机の下に、みたいな感じで。弟は何か普通だった。多分わかってなかったんだろうね、ちっちゃかったから。

— 結構覚えているね。

A: そうかなあ...、それ位しか覚えていない。

— 状況判断とか覚えているよね。中越地震の様子確認してみたんだけど、Aちゃんの地域は配水管とか壊れなかった？

A: うちの近くではなかったかもしれない。停電してた時も懐中電灯がいつも常備してあって。ろうそくは倒れたら危ないってなので使わなかった。

— 1ヶ月位車で過ごしていざ家に戻ろうってなった時、家の中が不安みたいな感覚とかはなかった？

A: 寝室が2階なんだけれども、いつでも逃げられるように暫くは1階で家族皆で寝てた。家族一緒だから安心した。

— 避難生活は思ったより大変だったの？

A: 想像してなかったから、本当に。こんな事ってあるんだなあと。

— 家は山近くだよね？雨とか降った際の土砂崩れとかは大丈夫だった？

A: あったはあったけど、そんなにはなかった。田んぼがあって山があってみたいに少し距離があったから。直接家に被害はそんなになかった。

— 復興というか、元の生活に戻っていく時って、気持ち的にはどうだった？学校に行くのが当たり前になるし、親御さん達が仕事に行くようになるし。気持ち的にはまだ地震の時の気分がのこるじゃない。(一方)友達と会える様になるのが嬉しいとか。

A: 友達と一緒にだったからというのはある。だから、そんなでもなかったかな。

— 友達は「学校がはじまります」となった時に全員登校出来たの？何人かは戻ってこれなかったとか。

A: 違う所に行っちゃってしまっていたっていう子はいた。それ以外は普通に学校に戻ってきてた。学校はプールにひびが入ったのかな。教室とかは普通だった。あと一時期体育館の屋根が危ないって事で立ち入り禁止だったって時があった。屋根が落ちるかもしれないって。危ないかもしれないから点検までは。唯一の避難場所なのにね。授業は戻って直ぐに再開した記憶はないなあ。学校では、「大丈夫だった？」とかの話からはじまった気がする。先生は「何かあったら言いなよ」みたいな感じで言ってくれた。「大変だったよね、皆でがんばろうね」と。

— こっち(九州)へ来て大きい地震があったけど、新潟でも怖い思いして、こちらでも怖い思いをして…。

A: このままもし何かあったら実家に帰れないかもしれないと思って。飛行機飛ばなかったら帰れない。それがいやだーと。あと、九州も地震起こるのかと思った。あんまり聞いた事がなかったから。

—— 向こうではしょっちゅうあったの？

A: しょっちゅうではないけど今までに何度も地震あったじゃん。東日本大震災みたいな津波はなかったけど。

—— 津波怖いよね。宮崎だと日向灘は怖いしね。延岡でも揺れた時、親から連絡来た？

A: 親からも友達からも結構来た。懐中電灯を枕元に置いた。あとペンライトも。

—— 新潟で地震あった時、避難所とかでボランティアとかはやった？

A: してない。される側だったから。オルゴールを貰ったの。色々物資が置いてあって「好きなもの持って行っていいですよ」みたいな所だったの。袋があつて。で、「(中身は)オルゴールみたいだから持っていきな」と言われて持って帰って、そこに「大変だと思いますが頑張って下さい」というメッセージが書いてあるトトロのオルゴール貰った。他の県からだと思うけど全然知らない人の。それはすっごい嬉しかった。今でも多分、実家にあるわ。

—— それは嬉しいよね。結構そういう物資とかあったと思うけど、もらう時に採め事はなかったの？

A: 別に、そういう事はなかった。割と一杯あったの。すっごい色んな人が送ってくれてたみたいで。

—— ペットがいたと思うけど、エサはどうしていたの？

A: うちの、安い時に大量買いしとくから。

—— 準備いいねえ。

A: すごいなあ、母親と思って。最近では地震とは意識しているみたいだけれども。その前から割りとそうした事する傾向があった。

(終)

(資料 2)

平成 23 年東日本大震災を経験して

C = 情報提供者 (神奈川県出身、平成 23 年東日本大震災を経験)

聞き手 (福岡県出身)

C: 私高校の校舎の一番上、5 階にいたから。

— そうそう授業中だよね。帰ってきたらニュースで流れてた。

C: 5 階だったから、揺れた揺れた。死ぬと思ったもん。2 時頃に揺れたんだよね。その時授業と授業の合間の休み時間だったの。15 分位。友達としゃべってて、「何か揺れてるねえ」みたいな、初期微動ってやつ？関東は地震が多いからまあまあ揺れてるなあみたいな感じだったけど、途中で「これ違うねえ」「うわ〜っ」みたいになって、先生に「机の下に潜れ」って言われて潜ったのね。その時友達が私の近くに来てくれてたから 2 人で入れなくて、私が 1 人入った。その子は頭だけ入れてた。で、私は「うわ〜っ」って泣いていた訳。もう死ぬんだと思って。

— やっぱ、いつもと違う感じの地震だったから？

C: いつもの揺れじゃなかったもん。いつも (震度)3・4 とかは、まあまあ揺れてるなあと思うけど。5 階ってほら、建物って上にいけばいく程揺れる構造になっているから。うちは山の上の学校だったし、相当揺れて。体感的にはね。私「うわ〜っ!!」て泣いてた訳。そうしたら友達が爆笑してて「泣くなしー」みたいな。「すぐ終わるしー」みたいな。1 分位じゃん、実際地震って。

— でも大分長かったんじゃない？

C: 感じ方としてはね。で、「収まったか？」と思ったらまた揺れてみたいな。本震とは別に余震が何回か起きてて。

— ずーっと下に隠れてたの？

C: うん、割と隠れてた。で、やっと収まったかという時に「避難するから防災頭巾被って」と先生に言われて被ったんだけど、その当時学級委員やってて、色々やんなきゃいけなくて。皆がちゃんと出たかとか。本当だったら地震始まったら直ぐにドア開けるとか、窓にカーテン閉めるとか、そういうのしなきゃいけないのもう出来る時間がなくて。

— だよ、マニュアルがあっても実際は出来るもんじゃないよね。

C: 何も荷物持たずに防災頭巾被って外へ出た。5階から避難して、体育館からは直ぐ行けないのよ。屋根が崩れていたりするから。だから一回校庭に避難して…。寒かった。3月11日だよ。で、外へ避難したけどずっと余震で、皆キャーキャー言ってた。

— 校庭に出た後もずっと揺れてたの？

C: ずっとずっと。

— 震度3・4位はよくあると言ってたけど、そういう時は(校庭へ)出ないの？

C: 全然出ないもん。出たのは初めてだった。初めて本番で、いつもは訓練では出るけど。初めて外出た。その時。先生達も初めてだから、結構(先生達も)皆ワーワーしてた。

— 校庭出た時って、まだ揺れてる訳やろ？その後ってどうすんの？

C: 先生が体育館の屋根落ちてないかとか確認して、寒かったからとにかく。皆を中に入れなきゃダメだし。ちょっと具合の悪い子とかも出てきちゃって。で、一応確認した後に体育館に避難、みたいな。交通機関が止まっているらしいから徒歩で自宅に帰れる子は徒歩で帰るみたいになってたけど、私はバス通学だったから帰れなかった。でも一回グラウンドで待機している時に、あまりにも寒くて。地震が収まった時を見計らってコートとかカバンを取りにいってみたい事をした。少人数で行くみたい。皆、初めての事だったんでよくわからなかったら、一応先生に付いて行って荷物を持って出て、一応皆マフラーとかして外で待機。その後は体育館に移動して…。何時までだっけなあ。午後2時に地震があって、私が帰ったのは夜の9時。

— 夜の9時！親とかには連絡はいつてるの？

C: 親が迎えに来ないと帰させないという方針になって。でも、回線が混み合いすぎちゃって電話が繋がらないし、うちの学校は当時携帯電話を持っていくのが禁止だったから、そこで「親に電話しますね」って言ったらそこで校則禁止ばれるねえ。だから電話も出来なくて。

でも持ってきている子が何人もいたっぽくて。それでもやっぱり、回線混みあすぎちゃって繋がらなくて。うちが連絡付いたのが夜7時8時頃で。親から「今から車で行くけど信号が停電」で、普段なら30分位で来てくれるも

のをすごい時間かけて迎えに来てくれて。友達で川崎出身の子がいて、高速(道路)で来なきゃいけないんだけど、高速が乗れない。地震のせいで乗れないから、友達2人を連れて、家帰った。

— 家はどうだった、大丈夫だったの？

C: 全く被害なかったんよ。ただ、ウサギの置物の顔が反対を 向いてたんだって。コロコロ転がって向きを変えたらしくって、お母さんが 感動してた。

— 食器棚が倒れるとか、ひびが入るとかは…。

C: ない。学校はひび入った。

— 家は何もなかったんだ。

C: なかった。でも横浜駅の方は地割れしてた。道路のコンクリが(割れてる様子)を両手で示しながら、「はっ！」みたいな感じで。

— 隆起しているみたいに？

C: うんうん。

— 結構ガタガタしているだろうから。帰る時には影響なかった？

C: 一応車で帰ったからそれはなくて、一時的な停電や断水もちょっとしていたらしいけどすぐに復旧したらしくて。特にテレビ観られないとかはなかったけど…。高一だったからまだ記憶が新しい。

でも、地震が起きた時は横浜が震源だと思った。「ああ、横浜やばい事になるんだ」って思った。9時に職員室のテレビを観たら、あれ、宮城が大変だと。「津波やばくね？」みたいな感じで。

こっちまで(津波は)来なかった。山多いしね。横浜は海に面しているけど津波の影響はなかった。だからテレビ観た時にめっちゃ衝撃だった。私が「災害の中心地」にいるのかと思ったら、そうではなくってうちの方 ぜんぜんいい方じゃんみたいな…。

— 友達とかはどうだったの？大丈夫そうだった？

C: 大丈夫だったけど、先生の旦那さんが出張で宮城に行っていて、すごく心配してたけどすぐ連絡ついて。津波の被害があった地域よりももうちょっと奥に

居たらしくて。そういう事はあったけど、家とかは特にひび入ったとかはなく。

— それからしばらく学校って行けた？

C: 3月11日に地震が起きてから新学期の4月の6日位までは一切学校なくて、学年末のテストが潰れた。地震で学校行けないから。やっぱり交通機関とかもメチャメチャだったし、またいつ大きな地震が来るか判らないから。帰宅困難者が東京とかでも沢山出ていて、凄い距離歩いた人ってのがニュースでも出てた位だから。帰れなくなると困るし。だから、約一ヶ月は学校が休みだった。

— 一ヶ月、長かった？

C: 期末テストが無くなったのは嬉しかったけど、ただ、やる事がなくてテレビとか観るしかなくて。でも、テレビ付けると津波しかやってないし。AC(公共広告機構)の「ポポポーン」ばかりやってて。鬱だよね、あれ。「挨拶ばかりしてるんじゃないぞっ」て、そういう感じだった。本当イライラしてて。苦情が多くて途中で無くなったんだよね、あれ。あたしも苦情言った。あと、節電してた。福島原発のせいで電気がない状況だったから。凄い節電ムードでパソコン全然いじらないようにしてた私。なるべく暖房とかも。(服を羽織る仕草をしながら)着こんで、なるべく付けないようにとかしてた。

— じゃあCちゃんの地域っていうのは、支援されるっていうよりする方？

C: 全然。する方だったと思う。叔父さんが福島の方にトラックで行って物資を運んだって。すごかったって言ってたけど。

— そういうのってさあ、今でこそtwitterとかSNSで結構普及しているから、どこどこでこんなのが足りませんってわかるけど、昔ってあんまりそういうのも無かったイメージなんやけど。

C: 確かに地震速報とかも鳴らなかったし、今は直ぐに鳴るけど…。

ニュースって津波の事ばかりやってて、何が足りないとか、全然そういう事やってくれないんだなあとは思った。この人が死んじゃってとかよりも、「今は行方不明の人探すべきじゃないの？」とか思ってたけど、でも他人事って言えば他人事だよね。観ている側からすれば。

— 被害って言うか、死者とかは出なかったの？

C: 横浜は関連死が1人出てたはず、確か。ほら、熊本でも車中泊してエコノミー

症候群になって。そういう感じで確か何人か亡くなっていた記憶がある。
寝る時に、筆筒がここにあるんだけど、筆筒が余震で揺れるから、お母さんが寝ぼけながら足で抑えてた(笑)。

— しばったり、固定とかしてないの？

C: そう、だからした方がいいなと思った。

— で、今はしているの？

C: いや。でもお母さんは、「地震があったら足だわ」みたいな事言ってる。

— 御飯とか困らなかった？

C: (学校の) 体育館に避難した時に、お水がどーんとステージに置かれていて、何リットルか。で、紙コップが用意されていて飲みたい時には自分で汲んで飲めみたいなシステム。だから全員に配られる訳じゃない。飲めない子も多分いたと思う。量足りないと思う、あれは。私は体育館から(その日のうちに自宅へ) 帰れたけれども、そこで寝泊りした子もいた。寝袋と かを他の学校から寄付してもらってたけど、カロリーメイトが1人2本分しかもらえなくて。私は7時間位体育館いたけど、「このカロリーメイトをどう分配するか？」みたいな事を皆で考えた。「今1本食べちゃうと後々お腹すくよね」とか話していて..。

— 食堂はなかったの？

C: うちの学校食堂ない。購買部もない。カロリーメイト2本が命綱みたいな。でも後々わかったんだけど炊き出しがあったらしくて、(友達) 御飯食べたって言ってた。

— 水とかカロリーメイトは、学校に元々常備してあったの？

C: そうそう。

— でもやっぱり災害が起こると思っていないからちょっと少なかったんだろうねえ。それから改善したっていう話は聞いた？

C: 食料も寝袋も増やしたらしい。あと、携帯を持ってくる事を許可した。うちの学校も。100年も変えなかった校則を変えた。100年前は携帯ないけど。

保護者から連絡がつかないのは不安だし、それで OK になった。

でも、A さんと同じ意見で、九州は防災訓練が生ぬるい。

— 防災頭巾があるって言ってたけど、こっちは無いの。他に違いはある？

C: まず防災訓練は各学期毎にテスト毎にある。中間終わったら中間の終りの行事で防災。期末の後も防災。学年末の防災。年に 5・6 回はやるんじゃない？

— 5・6 回！それは (九州では) ない。全然ない。

C: 押さない・駆けない・喋らない。「おすし」とかもあるよね。「おかし」だけ？「おはし」とかもあるよ。今まではだらだらとやっていたけど、震災の後は 5 分ぐらいで全員集合したっていう記録を残したぐらい、皆真剣にやってた。死ぬ思いしないと人間やらないなっていう。

丁度 3 月 11 日に、地震が起きる前の日本史の授業で関東大震災の映像を観てて、超タイミング悪くて、(震災の時) 脳裏をよぎった。あの焼け野原みたいになるのかなって。それで涙を流したの。

— そういうフラッシュバックみたいな事があるんだねえ。フラッシュバックと言えば、今回 (熊本地震でも) あったやん？思い出さなかった？

C: コンビニで (バイトで) 働いていたんですよ。お客さんの携帯が変に鳴り出した瞬間揺れだした。で、「外出てっ！」て頼んだ。

— やっぱマニュアルがあるの？

C: ない。聞いてない。だから、一応出ておいた方がいいかなと思って自分の判断で出るって言った。コンビニって自動ドアだから、もし閉まっている状態で停電とかになったら、力入れないと開かないじゃない。とっさに考えて、出るって言った。

— すぐ自動ドア、止まっちゃった？

C: いやあ、全然。でも親が色々心配して電話がめっちゃかかってきた。本人はケロツとしてるから、「なに？」みたいな。友達から「娘さん大丈夫っ？」て電話来たんだって。

— 私、その後コンビニにすぐ行ったんだけど、水とかあつという間に無くなっていたの。震災の時もそうだった？

C:9時過ぎに家帰って、家帰って何もつくってないからコンビニいくぞってな
て行ってみたら、「こんなにコンビニって物無くなるんだ」という位物がな
かった。

—でも結構直ぐに行ったんでしょ？

C:7時間経っていたから、震災から。だから、皆買いためするんだなあと思った。
カップラーメン食べました。

—やっぱりカップラーメンと水？

C:水は確かに無かったかも。お弁当とかパンとかも無かった。

—他に無くて困った物ってあった？

C:それよりも、あんまり楽しそうな事も出来ない気がして。物(がない)って
うのはそんなになかったけど。家族は全員ちりじりでした。お母さんは仕事
場にいたから直ぐ帰って来てたけど、お姉ちゃんは東京にいて、電車が止まっ
ちゃったから今日は友達の家泊まるって言ってたし。お姉ちゃんはビルの
13階にいたらしくて相当揺れたって。お爺ちゃんはゴルフしに千葉へ行って
た。

—千葉も揺れが相当。

C:お爺ちゃん最初脳梗塞だ自分と思ったんだって、目の前が揺れてるから。う
わっってなっかがんでいたら、友達に「全部が揺れてるんだよ」と言わ
れて地震に気が付いたと。

—でも皆無事だって事は確認取れたんだ。

C:一応。

—Cちゃんは支援する側だったけど、主にどういった支援を送るのがいいか
とか、必要そうだなあというのは近くにいて判った？

C:やっぱり、物よりお金の方がいいんだろうなと思った。お金だったら欲しい
物をその人達が考えて買えるじゃん？物資も必要かもしれないけど、お金あ
げた方が後々使えるかなと。「余剰」って絶対出てくるじゃん。これ以上はい

らないみたいなの。それだったらお金の方が使い道があるのかなと思う。募金はしてた。

— そういう活動には積極的だった？

C: いや。そうでもないと思う、今考えたら。節電とか水を余り使わないとか、そういう事はしていたけど。じゃあ直接的に何かしてたかって言うと、募金位かなあ。それと、怪我はしてないけど、皆メンタル的にやられてたと思う。津波の映像を観て気持ち悪くなっちゃう人とかもいたらしくって。ほら、ニュースとかで「これから津波の映像が流れます、ストレスがかかる方は観ないで下さい」みたいなのあるじゃない？観る事によって、ちょっと気分が悪くなる人もいるんじゃないかな。余震がきつくない？また来る、また来るって。イヌ2匹いたから抱えてトイレに逃げた。トイレはなんかね。唯一家の中で柱が4つあるって言う勉強してて。トイレだけ潰れないって聞いてたから、トイレのドア全開にしてイヌ抱えて、こう。余震収まるまでっていうのを日中やってた。でも、一端家から避難したらしい。私が学校に行って帰って来れない時に。お母さんの職場は耐震が強い構造の建物なんで、イヌ2匹を抱えて避難してたって。

— そういう所って、入っても大丈夫なの？

C: もちろん、地域の避難所でもあるから。

— イヌとかも？

C: 別に。うちのお母さん職員だったから特に言われなかった。

— 最後に。実際に震災という経験を経て、自分が次に同じような事があったらこうしようとかって言う考えは？

C: あれじゃない？とにかく自分の命を守るしかないなあって。地震で怖いのは正直津波だなあって思ったから。横浜だし。大丈夫だろうって避難しなかった人が震災で津波に飲まれて死んじゃっている人多いから、こう、ちょっと過剰な位がいいのかなって思う。これ位の地震なら大丈夫じゃなくて、この位の地震でも逃げようって。自分の身は自分で守る。サバイバル精神だよ。はい。

— わかりました。ありがとうございました。

(終)